どんな授業も演習も敵わない――
現場の重くて強い言葉に学ぶ、
震災から復興する人びとの思いと暮らし

研究室訪問
インタビュー

**本学教員の研究室を訪ねるインタビュー企画「研究室訪問インタビュー」。
今回登場いただくのは、
リベラルアーツ学部の太田美帆准教授です。**

太田美帆准教授

被災者一人ひとりの想いに寄り添う聞き書き活動を、学生と

――国際協力や地方創生を研究テーマにされていますが、東日本大震災を機に、毎年ゼミ合宿で陸前高田市を訪れ、復興・交流につながる活動を継続されています。どのような活動か教えてください。

太田　玉川大学文学部に着任したのが２０１１年４月で、国際協力をテーマにゼミナールを立ち上げる予定でした。しかし、前月に発生した東日本大震災による大混乱の中で、「私たちが今すべきことは何か」と、学生と考え、復興支援をメインに活動することを決めました。学生たちはがれき撤去や支援物資の仕分けなどのボランティアに参加したり、ゼミ合宿では風評被害に悩む福島県の農家に民泊し農作業を体験しながらお話を伺ったりしました。その中で、「被災地の聞き書き１０１プロジェクト」（「公益財団法人東京財団」と「ＮＰＯ法人 共存の森ネットワーク」との協働プロジェクト）のご縁をいただき、同年12月にゼミ生有志10人とともに陸前高田市に入りました。

聞き書きは、学生と被災者が一対一で向き合い、壊滅的な状態となってしまった故郷の思い出などをじっくりと聴き、文字で記録する活動です。大切な人も家も無くした方々の胸の内に耳を傾け、それを文字に残せたことを、陸前高田の方たちはとても喜んでくださいました。

それから毎年ゼミ合宿として訪問しています。長期化する仮設住宅生活を盛り上げ、在宅避難者と仮設住民や仮設から卒業された方々の交流・再会の場として、地域の夏祭りを復興させるお手伝いは、２０１４年まで続けました。

――被災者の苦しい胸の内を聞いた学生は、どのように思ったのでしょうか。

太田　津波の甚大な被害に遭ってもなお、「それでも海が好き」という声を聞き、学生はたいへん驚いていました。故郷への愛着や自然を相手とする生業への誇り、地域のつながりを語る姿はまぶしく、都会の若者たちの経験にないことで、ひるがえって、自分たちの生活や人生を深く考えるきっかけになったようです。ある学生は、「いつか故郷に戻ったら消防団に入る」と決意を語ってくれました。やはり現場の方々の発する言葉は、重くて強く、どんな授業も演習も敵いません。現場の力を痛感しました。

陸前高田の魅力と味力を学内外に伝えるゼミ活動

――聞き書きと同時に、玉川大学のコスモス祭でのポスター展示や冊子配布、あるいは朔風館食堂で特別メニューを販売するなど、陸前高田市の魅力を発信する機会を設けています。詳しく教えてください。

太田　コスモス祭では毎年、ゼミ活動や合宿の成果をまとめたポスター展示、陸前高田の魅力をまとめた冊子の制作・配布をしています。また、こだわりの特産品は陸前高田の大きな魅力なので、模擬店や物産販売もしており、学外からの来校者にもとても人気です。

ゼミ独自の聞き書き活動も２０１４年まで続けました。しかし、時間の経過とともに、仮設住宅を卒業する方が増えて住民が散在し、さらに学生と語りたいというニーズも減少し、「いつまで被災者と呼ばれるのか」と反応も変化していき、私たちの活動も次の段階に移行する転機が来たと皆で話し合いました。そこで学生たちから、いつまでも「ネガティブな被災地」としてではなく、陸前高田の「ポジティブな魅力」を発信しようと提案があったのです。ちょうど震災の風化がささやかれ始めた頃だったので、活動の軸足を現地から東京に移すことにしました。現地での浜作業や農作業のお手伝いを通して、自分たちが五感で感じた陸前高田のポジティブな姿を、キャンパス内外で発信することにしました。

その一環で、同市の食材を使用したオリジナルメニューを販売する「陸前高田の味力（みりょく）プロジェクト」を２０１６年度から始めました。ゼミと本学・朔風館食堂と学友会とのコラボレーションです。合宿での民泊家庭には漁業や農業に携わる方が多く、その産品を朔風館食堂でメニューにしていただきます。水産加工会社のワカメや肉屋さんの豚肉、リンゴ農家の米崎リンゴは毎年恒例です。食材リストの作成、食堂関係者との打ち合わせ、現地への発注、本学広報課、学友会との連絡も必要で、すべて学生が分担を決めて行っています。ゼミ生が20人もいると報連相がうまくいかず、失敗も多いですが、苦労した分の実践が学生の学びになっていると思います。

研究室訪問
インタビュー

ニューノーマル時代のフロントランナーである学生へ、社会へ踏み出す勇気を育む

オンラインゼミ合宿（2020年）

—PROFILE—

おおた・みほ

青年海外協力隊員としてガーナの農村開発に携わる。以降、農村生活改善分野を専門として世界各地の国際協力事業に従事。日本の農村社会振興の実践と研究にも取り組む。2011年に本学着任、2020年より現職。JICA海外協力隊技術顧問。

コスモス祭（2019年）

ゼミ合宿牡蠣作業（2018年）

見えない悲しみに想いを馳せ、震災から復興する過程を伝える

——太田ゼミは被災地をサポートする一方で、被災地の方々から温かいサポートをいただいたり、玉川大学や学友会からもサポートがあったと聞いています。どのようなことですか。

太田　民泊は2人1組でお世話になるのですが、最初はみな緊張し不安がります。ところがご家族の皆さんが自分の子どもや孫のように温かく、また新鮮な海の幸山の幸でもてなしてくださるので、すぐに打ち解けて、その後も手紙やSNSで交流を続けている学生もいます。

ゼミ合宿は、陸前高田市まで夜行バスで往復する2泊5日の強行軍です。費用もかかるので、大学や学友会からの活動費などの支援は本当に助かります。

——2012年度からは、陸前高田の魅力を学外にも発信しているそうですが、どのような活動ですか。

太田　ありがたいことに町田市からお声がけいただき、復興支援や地域振興に関わる他大学の学生団体と交流し、成果と課題の情報を共有するイベントに参加しています。現在は「ガクマチEXPO」という地域活性化に関する活動をしている学生同士の報告会に参加したり、「まちカフェ」というイベントで物産品を販売したりしています。ゼミ生が市民ラジオに出演する機会もいただきました。学生が発信する陸前高田市の魅力や味力から、町田市民に被災地の現状を知っていただき、それとともに防災意識を高めるお手伝いができればと考えています。

——昨年はコロナ禍で授業やゼミ合宿などの活動のあり方が様変わりしましたが、何か工夫をされたのでしょうか。

太田　前例のないチャレンジの連続でした。現地訪問は叶わないけれど、先輩たちがつないできたご縁を、自分たちの代で終わらせたくないという学生たちが、6月から手分けしてこれまで合宿でお世話になった方々に電話でご様子を伺いました。そこで飲食店やイベントの営業自粛等により仕事が激減し経済的に影響を受けている生産者や、自粛生活で寂しい思いをしている方々のことを知り、なんとしても交流を継続し、特産物や復興状況の広報に力をいれようと決めました。この状況下でもできることをと皆でアイディアを出し合い、「オンラインゼミ合宿」案を練りました。

けれど「企画は大歓迎だけど、オンラインなんてムリ！」とおっしゃる方もいたので、これまでのご縁を総動員して様々な方に相談しました。最終的には10団体がご協力くださり、毎年現地でいただいていた牡蠣やリンゴ、海産物おやきなどの特産品を事前に取り寄せて、試食しながらその生産秘話を伺ったり、地域づくり関連団体にその成果や課題を伺ったり、民泊でお世話になった家庭とつないで郷土料理を一緒に作ったりと、盛沢山の内容になりました。

すべての連絡調整を学生が分担してやりましたが、前例のない試みだったので、それはもう本当に大変で、現地にご迷惑もおかけしてしまいました。それでも、陸前高田の皆様の温かさに支えられて何とか実施できました。

そうやってお話を伺う中で、「理想とする復興を10とすると、現在何割くらい復興しているか」という質問をお一人お一人にしてみました。どなたも「道路も建物も今年度中に整備されるからインフラは9～10割」と迷いなくおっしゃいます。「でも、う～ん……」と考え込まれ、「建物はできても、賑わいがない。若者が少なくなって寂しい。まだ前を向けない人もいる……」心の復興は3～8割というお答えで、平均すると5割でした。10年経っても5割なんです。どなたもハード面と心の面を分けて答えられたのが印象的でした。陸前高田で会社経営する方で、地域の担い手である比較的若い世代でも「心はせいぜい3割かな」と言っていたのが衝撃的でした。「沢山の市民が犠牲になったことは一生戻すことが出来ない」「復興が10になることは決してなく、最大が8のまま一生生活するだろう」という声も聞かれました。

こういったお話をまとめ、HPで発信しています。2時間のお話の文字起こしに7時間かけた学生もいて、話し手だけでなく聞き手である学生たちの思いも詰まったHPになっています。ぜひご覧いただきたいです。（下記HPご参照）

今年は東日本大震災から10年目の「節目」と言っているのは、東京をはじめとする被災地に暮らしていない人たちで、被災地の皆さんにとっては節目でも何でもなく、昨日のことのように思い出し、10年を経て、より悲しみが深まり、傷が深まっている方がたくさんいるのです。

毎年のように世界各地で災害が起こり、新たな被災地が次々と生まれています。しかも近々首都圏や東南海地方で大地震が発生すると言われています。私たちも防災や減災について学び、行動すべき時です。だからこそ、陸前高田の復興の姿を記録し、未来に残すことは非常に意義のあることだと考えています。私としても、ライフワークとして学生と共に取り組み、考え続けていきたいです。

社会とつながるチャレンジこそ、人間力を高める学びがある

——ご自身の国際的な活動に参加した経緯を教えてください。

太田　ちょうど就職氷河期の頃で、大学4年の夏休みは就活で終わるだろうから、約2か月間も夏休みがあるのは3年次が人生で最後だと考え、今しかできないことをしようと調べました。すると、フィリピンでの30日間の植林ボランティアがあり、思いきって行ってみたら本当におもしろくて、国際協力を深く考え、人生をも変えるきっかけになりました。

最近の学生たちは、就活でエントリーシートを書く頃に、自分探しを始めるようですが、パソコンに向かって長所を考え、やりたいことを探してもなかなかみつかりません。でも社会に一歩出てみれば、やるべきことはたくさんあり、また自分に何ができ、できないのか、客観的に自分を見つめる機会になるはずです。「でも、コロナ禍だから……」と委縮するのも、もったいない。今はオンラインで世界中とつながれるようになったので、逆にチャンスです。社会とつながった時の経験が人を変えるのは、陸前高田市でのゼミ活動で経験済みです。キャンパスから一歩出たところにも学びはたくさんあるので、学生には「いろいろとチャンレンジしてほしい」と常々言っています。

——国際協力や地域復興支援などを目指す学生を持つ保護者の皆さまに向けて、メッセージをお願いします。

月並みですが、かわいい子には旅をさせてほしいと思います。「旅行」ではなく、居心地のよい空間からアウェーへ、マジョリティーではない環境へ飛び出す……。そんな冒険へ、背中を押していただきたい。親御さんの心配な気持ちも分かりますが、いざという時の危機管理を一緒に考えるなど、「やってみたい！」という気持ちを折らないように応援していただければと思います。

世界はすでにニューノーマルの時代に入っています。そのフロントランナーは、学生たちの世代です。「コロナ世代」と悲観しないでほしい。前例に囚われず、私たち世代が想像できないようなクリエイティブな企画やプロジェクトを考える力があるので、その力を発揮して新たな世界にチャレンジしてほしいと考えています。

check! https://note.com/rikuzentakata_